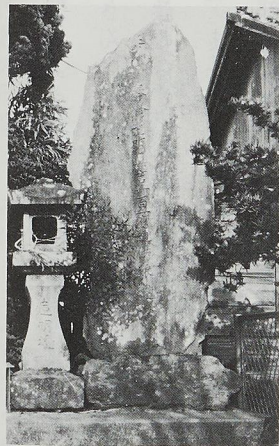


と読誦するが、この大意は、「大日如来さま、どうか大慈悲心を以って我等に功德（ごりやく）を与えて望みをかなえて下さい」ということである。

そしてこの真言を誦すれば一切の罪障を除き、この真言で加持した土砂を死者に散ずれば極楽往生疑いなしといわれ、南北朝時代に始めて光明真言結集の造塔を見たといわれている。

このように単に読誦しただけでなく、その行為を永久に刻んで、人々の一切の罪障を除き、現世の幸福と来世の極楽往生を得ることを願ったのが、読誦塔であり、これは、庶民の信仰の名残であるとともに貴重な文化財である。



光明真言塔

第八章 現

代

第一節 政治

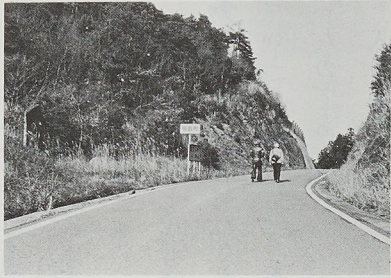
1、行政区画と呼称の変遷

明治二年（一八六九年）版籍奉還後の徳島県と現鴨島町内の区画と呼称（呼称）の変遷は次の通りである。

年号	区画	呼称
明治二年 (一八六九)	県	版籍奉還により六月十七日、徳島藩（阿波一国と淡路〔津名郡の一部を除く〕）を置き、蜂須賀茂詔知藩事となる。
明治四年 (一八七二)	県	一、徳島藩は徳島県と改称し、井上高格大参事（知事）とな

明治二十三年 (一八九〇)	村	郡制が改められ麻植郡名が復活し、麻植郡役所が川島町に設
明治二十二年 (一八八九)	村	森山村……森藤・山路・中島・内原の各村が合併 牛島村……上浦・牛島・麻植塚の各村が合併 鴨島村……鴨島・喜来・上下島の各村が合併 西尾村……飯尾・敷地・西麻植の各村が合併 新しい「町村制」が実施され、左のような新しい区画が生まれた。
明治十三年 (一八八〇)	県	二月二日、全県あげての運動のかいあって徳島県は高知県から離れ独立した。
明治十二年 (一八七九)	村	小区が廃止され、組合役所が設けられると各村の離合集散があった。現鴨島町の各村は異動がなかったようである。
	県	時に香川県は名東県の管轄から独立し旧に復する、また淡路一国は兵庫県に併合する。

明治五年 (一八七二)	郡	従来定められていた各郡を大区とし、郡内の数か村を合わせて小区とした。県内を十大区、その下に七十一小区が生まれた。麻植郡は第五大区となり、小区は五つとなった。本町内の区分は左の通りである。
	村	牛島村・上浦村・山路村・中島村・森藤村・麻植塚村・内原村 (一 小区)
	村	飯尾村・上下島村・敷地村・山田村(現川島町山田)・鴨島村 (二 小区)
明治六年 (一八七三)	県	喜来村・西麻植村 二月二十一日、香川県が名東県(本県)の管轄となる。
明治九年 (一八七六)	郡	八月二十一日、阿波は名東県名を廃され、高知県に編入、同



神山への峠道(梨の峠)

3、建設

(1) 道路

明治以後における幹線道路は国道西条―徳島線だけであつたが、大正十年(一九二一年)に西麻植―下浦線が開通した。自動車が普及するにつれて次第に交通渋滞が甚だしくなり、新しい道路の建設を必要としたが、新国道一九二号線が昭和三十四年(一九五九年)度より東から建設にかかり、西麻植の西端まで三十八年(一九六三年)度に完成を見、また国道鴨島三本松間が国道三一八号線として拡張され、現在は阿讃山脈をトンネル工事途中で、これが完成すれば清水越とともに阿讃の中央道として貴重な交通路となり、当町の発展に

2、財政

合併当時の昭和二十九年度の歳入、歳出状況は歳入八千二百四十三万二千五百九拾九円、歳出八千二百六万三千五百七十七円であつた。

昭和五十八年度当初予算の歳入は、四十二億六千三十万九千九百円である。

昭和四十一年 (一九〇八)	町	置かれた、この郡制も大正十年(一九二一年)四月十二日廃止された。
昭和二十九年 (一九五四)	町	七月二十日、鴨島村が町制施行。
昭和三十年 (一九五五)	町	三月三十一日、四ヶ町村が合併し、現鴨島町が発足(これより先の三月二十日、板野郡一条町の先須賀・四ツ屋地域が牛島村に編入)。
昭和三十一年 (一九五七)	町	一月一日、東山村の槌山地を編入合併。 三日三十一日、阿波郡柿島村の知恵島地区を編入合併。

さらに寄与するであろう。

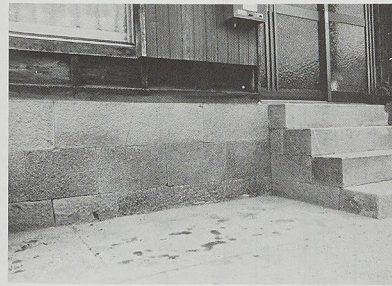
また、神山方面への峠道も自衛隊によつて最近整備され交通の便も良くなった。

(2) 堤防

南の山沿いの台地を除いた昔の鴨島町はひと言でいえば河原である。藩制初期においては江川が本流であった。また、その後次第に本流が北へと移っていったが、一旦それが氾濫すれば全町海となつたのである。

人口の自然増加によつて次第にその河原が開墾され、その近くに家を建てるときは、高い地盤を築いてその上に建てたのである。しかし、その人たちも度々家や家族ごと流されたことは、今に語り伝えられている通りである。

明治五年（一八七二年）にはその氾濫を防ぐ



地盤の高い家

ため、川島の城山から喜来村までの間に川真田市兵衛などの提唱によつて堤防を築くことが決定され、多くの人々の血と汗と絶間ない努力の結果ついで出来あがつた。その後東へも延長したり、かさ上げをしていったのであるが、たびたびそれも切れて災害をもたらしたのである。

明治二十一年（一九八八年）七月九日の洪水の時には、上下島村出身の喜劇俳優曾我廼家五九郎さん（武智故平）の家も石臼以外は水びたしになり畑も流され丸裸になり、一家をあげて北海道へ移住した。その後もたびたび堤防が決潰して水害を受けたので政府もついに腰を上げ、善入寺島を遊水地帯として、本格的な吉野川築堤を決定し、明治四十年（一九〇七年）から大正十年（一九二一年）までの十五年間の継続事業として、工事を開始することになった。

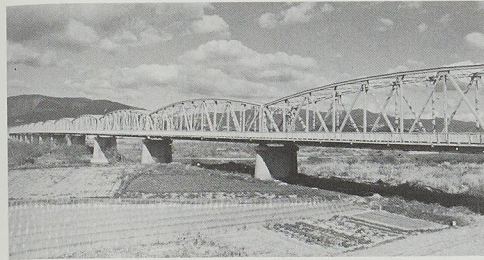
有史以来の大工事が起工され、その工事が終わったのは、昭和二年（一九二七年）であり、ここによやく人々が水の脅威から解放されたのである。しかし立退きが決定した善入寺島五百戸余りの人たちは、永年住みなれた

家や耕地を捨てて当町へも移住して来ているが、川島町城山上にある「移転の碑」は真福寺の北側の麓にひっそりと建っていて、まことに悲嘆極まりない文章で左の通り刻まれている。

「嗚呼孰か遂に墳墓の地を去つて相離れと謂わん也。此の地の士民痛嘆ここに於て窮迫せり。將に辞訣、その事並びに転地を石に書いて後世に残さんとす。時に大正十年八月十五日建之。」

(3) 橋 梁

国道三一八号線の吉野川にかかる中央橋（総延長八二〇、六メートル）は、昭和二十五年（一九五〇年）三月三十一日着工、昭和二十八年（一九五三年）三月三十一日に開通したもので、麻植・阿波両郡をつなぐ貴重なパイプ役となり、また現在



中 央 橋



中央橋開通時の渡り初め(露口一家)

掘削中の香川県へのトンネルが完成すれば、阿讃の中央道としてさらに貴重なものとなる。この橋が出来るまでは源太渡しという舟の渡し場があったが、後には仮橋（陸軍工兵隊による架橋）を利用して来た。その仮橋もたびたび水に流され不便であったが、中央橋の完成によつて、それが解消

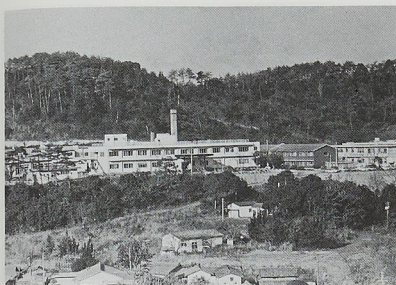
され、また鴨島町商店街の発展に寄与した。しかし、この橋も現在では狭隘を感じるほど交通量が多くなっている。

また、吉野川を利用した北岸への交通路は、粟島―八幡間の粟島渡しがあり、ここは四国霊場巡



大正時代の粟島橋(川島町島田忠一氏撮影)

拝者の道でもあった。交通量が非常に多かったため、仮橋や潜水橋を作ったりしたが、現在は廃止されている。また牛島―六条間の六条渡しも、現在は潜水橋によって通行している。



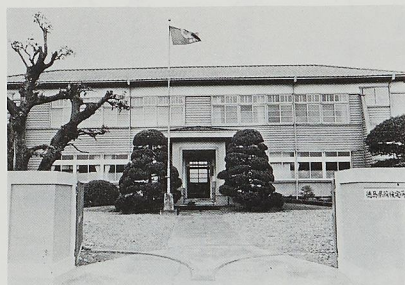
国立療養所 徳島病院

(4) 公共施設

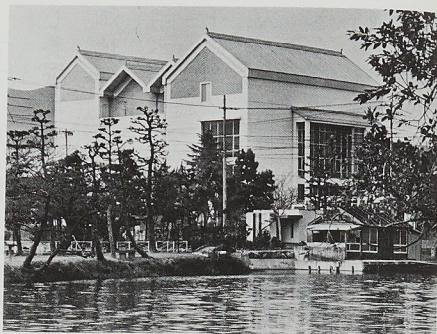
公共施設は、麻

植郡では川島町に

集中していたが、養蚕の発達に伴ない、立地条件にめぐまれた本町に製糸工場が多く建設されたことなどによって、まず大正八年（一九一九年）県蚕業試験場、昭和八年（一九三三年）に県繭検定所が招致された。その後、国立療養所徳島病



徳島県繭検定所



鴨島町中央公民館

院（旧国立徳島療養所）が昭和十四年（一八三九年）に、県の職業安定所が昭和十五年（一九四〇年）に、戦後は県の鴨島保健所、同職業訓練学校、農林省徳島統計調査事務所麻植出張所、鴨島電報電話局、日本専売公社鴨島出張所、麻植協同病院、町立鴨島商業高校（後、県に移管し徳島県立鴨島商業高校と改称）などが設立された。

また、スポーツ施設として昭和八年（一九三三年）七月十六日、県下で初めての二十五メートルプールが完成、戦後町民体育館、飯尾コミュニティセンター、青少年野外活動センターが、また昭和五十四年（一九七九年）、当時四国一の規模をもち、藍倉を象徴した白亜の殿堂、鴨島町中央公民館（老人福祉センター併設）が建設され、その偉容

を清流江川の水にうつしている。

(5) 麻名用水

明治三十五年（一九〇二年）ごろをピークとした阿波藍が、ドイツの化学染料インジゴにおされて、次第に養蚕に切り替える農家がふえていった。

つづいて化繊の発達から絹織物の不振をきたし養蚕業が確実性に乏しくなり、桑園減反後の畑地の有効利用を求めて米作の要望が高まり、用水路を開設する水利計画が立てられ、明治三十二年（一八九九年）麻植・名西両郡長が発起人となり、両郡十三町村による組合の創設を見、さらに明治三十七年（一九〇四年）に大干害があったので、その促進が強く望まれた。いろいろと案がねられたが、結局川島町の城



麻名用水

山の下から疎水することとなり、明治三十九年（一九〇六年）十二月一日、起工し、明治四十五年（一九一二年）三月、足かけ七年の歳月を費して完成し、千二百五十四町歩余りの水田を灌漑することが出来るようになったのである。当時の金にして総経費計四十四万六千円余りを要した大事業であった。

第二節 産業経済

現鴨島町は、他町村に比較して土地が肥沃であったので藍の反当生産高が高く、また、それを原料とした藍玉の製造という組合せによって、次第に富を蓄積した人たちが多く出た。しかし、明治三十四、五年（一九〇一〜一九〇二年）がピークで、ドイツの化学染料におされて次第に下降線をたどり、農家の多くは養蚕業に転換し、大正時代から昭和初期にかけて、その最盛期

となった。

この時期に藍商たちの蓄積された資金は、数多くの製糸工場の建設や蚕種製造に転用されて、現在の大鴨島町発展の夜明けを迎え、商店街が発達して農村から阿北の中心商業都市へと急激に変貌していった。

また、この鴨島町の藍商や蚕種業者の蓄積資本が、阿波と阪神との海上交通のパイプである阿波国共同汽船株式会社の創設や、現在の国鉄徳島本線の前身である徳島鉄道株式会社の建設、呉郷文庫の開設など、県の交通、経済、文化面の発展に大いに貢献した。

大正八年（一九一九年）には、県蚕業試験場が徳島市から鴨島町に移されたことよって、本町が県下の養蚕業、製糸業界の中心地となった。

近年は、工業団地を牛島地域に造成して、工場誘致につとめている。昭和五十九年（一九八四年）には大和真空工業所をはじめ、先端企業五社が進出してきて内陸工場地帯として力強く歩みだしている。

1、藍作



よく育った藍

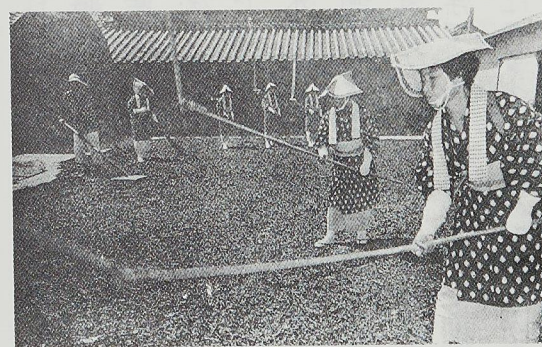
阿波藍は、藩制時代から日本全国の市場を独占していたので、吉野川沿岸の平地はもちろん山間部まで藍作がなされていた。特に現鴨島町地域は地味が藍作に適している上に、堤防が未完成の時代では洪水のたびに肥沃な土砂を運んできたので、藍住町などともに県下でも最優秀品の産地となっていた。

明治元年（一八六八年）には六千六百斤（三千九百六十キログラム）、同五年（一八七二年）には五万七千斤（三万四千二百キログラム）と次第に増加した。

しかし、明治四年（一八七一年）廃藩置県とともに藍の統制がとかれ、製造販売が自由になり、粗製乱売が始まった。

阿波国の売場株の開放とともに、岡山・広島・愛知・埼玉の諸県も阿波国から教師を招いて製藍法の研究を始め、次第に生産が増加した。輸入藍の漸増と他県の製産増加によって、競争が次第に激化して、阿波藍も危急存亡の時期に追いこまれる状態になった。

県としてもこれの対策に頭をいためた結果、製藍の改良事業、運賃の軽減策として阿波国共同汽船会社の設立、肥料の合理化などに力を入れたが大した効果もなく、また一方では、輸入藍が明治二十年（一八八七年）には四万



藍こなし(上田利夫著、阿波藍民俗史より)

八千キログラム、二十一年（一八八八年）には十六万八千キログラム、三十年（一八九七年）には、七十二万キログラムと急増し、三十五年（一九〇二年）以降になると安価なドイツ染料が阿波藍を圧倒してきたのである。

藍の値段が次第に下がり収入が少なくなると、藍作農家は比較的收入の多い養蚕に転換を余儀なくされていたのであるが、一方では米作への転換の声も出て麻名用水の早期開設へと進展していった。

なお明治十九年（一八八六年）九月の阿波藍商繁栄見立鏡には東西合わせで四百余りの業者が名を列ねており、その中に現鴨島町関係では二十余業者の名が出ている。

また明治二十九年（一八九六年）十月の徳島県藍商繁栄見立一覧表も併せて次ページに紹介してみよう。

なお現在でも町内には藍寝床のある家が数多く残っていて当時の藍製造の盛大であった歴史の跡をとどめている。

明治十九年九月の阿波藍商繁栄見立鏡

Table of names and titles for the right page, including '阿波藍商' and various family names like 山崎, 松本, 高橋.

東

Table of names and titles for the left page, including '阿波藍商' and various family names like 山崎, 松本, 高橋.

西

商繁榮見立一覽表

Table of commercial establishments in the left page, organized by district (e.g., 支那, 兪, 兪, 兪, 兪) and listing various businesses and their locations.

支 西野嘉右衛門
兪 須野千太郎
兪 須野千太郎
兪 須野千太郎
兪 須野千太郎

商繁榮見立一覽表

Table of commercial establishments in the right page, organized by district (e.g., 支那, 兪, 兪, 兪, 兪) and listing various businesses and their locations.

明治二十九年十月の徳島県藍商繁榮見立一覽表

2、養蚕と製糸

明治の初めごろは、当町の農家は藍作を主とし、南部山麓の一部分の湿地では米作が行われ、養蚕も副業的にはどこどころで行われていた。しかし、次第に輸入藍に押されて養蚕農家が多くなり、またドイツ染料に最終的な大打撃を受けてからは、養蚕へと転換するものが次第にふえていった。また、麻名用水の開通によって、米作農家も次第にふえ始めたが、麻名用水を利用できない西麻植地区や旧鴨島地区の農家は、やはり養蚕業を主としていた。

養蚕の歴史をたどると、明治五年（一八七二年）十一月には、すでに県知事による養蚕奨励の告示があり、また明治六年（一八七三年）



かいこ

には兵庫県から真名井純一を招聘して県養蚕取締りとし、県が桑の植え付けに補助金を与えるなどして奨励した。また、川島町に徳島養蚕取締所を置き、鴨島町では、西麻植駅の西付近、牛島関境など、旧茂藪を開墾して桑の植え付けをした。

しかし、当時は蚕種の不良、養蚕技術の未



まゆ

熟などのため、なかなか成績もあがらなかったが、明治二十五年（一八九二年）川島町に私立養蚕伝習所が設置され、県の補助もあって次第に生徒数もふえ、その後同三十二年（一八九九年）には、郡立養蚕伝習所が同じく川島に開設されるなどして、次第に養蚕技術も進歩の道をたどり、同三十年（一八九七年）代に入ってから、蚕種製造も町内で盛んになり、明治三十九年（一九〇六年）には牛島村十九業者、森山村八業者、鴨島村十三業者、西尾

村九業者の多きを数えた。

大正八年（一九一九年）には「徳島県蚕業試験場」が県下蚕業界の中心地となっていた鴨島町に設立されて、その研究、改良、指導にあたり、実習生も募集して養蚕技術の向上をはかるとともに指導者の育成も行った。

また、これにさきだち明治二十五、六年（一八九二〜一八九三年）ごろには初めて松浦、石山などの「達磨製糸」が開業したが、それからは年々歳々大小業者が続出し、明治四十年（一九〇七年）には機械製糸の佐渡製糸、筒井製糸などが大規模な設備で発足し、また小工場も次第に機械化して盛んになり、大正初期には大小合わせて二十数軒の工場の機械



筒井製糸

が廻り、旧鴨島町の隅々まで、その音が響いていたといわれている。

大正十一年（一九二二年）三月には、片倉製糸鴨島工場が長野県から進出して来て、いよいよ製糸業の町として重みを増していったが、一方大正四年（一九一五年）ごろからの不況と、そのころからの人絹の進出もあり、大正末期にかけて製糸業界も先行不安の影を落とすようになって来たのである。

なお、大正から昭和初期にかけての女子従業員は約四百人から七百人といわれ、その人たちによって生産された生糸は年間六十五トン以上に達した。

太平洋戦争勃発前には大手の筒井製糸と片倉製糸、それに小さな数軒の業者のみとなっていたが、戦後片倉製糸も工場を閉鎖し、現在は筒井製糸のみが細物高級生糸を生産して、わずかに製糸工場の町鴨島の面影を残しているのみで、あの大きな煙突が、ありし日の栄光を物語るかのように高くそびえている。なお、本町の年代別の主だった製糸工場は次のページの表の通りである。

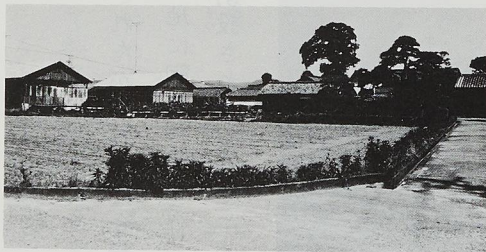
明治時代	佐渡製糸系 筒井製糸系 松浦製糸系 河内製糸系 笠井製糸系 岡本製糸系	大正時代	筒井製糸系・須見製糸系 片倉製糸系・河内製糸系 笠井製糸系・大久保製糸系 松浦製糸系・片岡製糸系 鎌田製糸系 系田川製糸系 佐渡製糸系 麻植製糸系 石田製糸系	昭和時代	戦前	戦後
					松浦製糸系 笠井製糸系 岡本製糸系 筒井製糸系 片倉製糸系 後藤田製糸系 石田製糸系 佐渡製糸系 大島製糸系	筒井製糸系 片倉製糸系 戸井製糸系 麻植製糸系 吉田製糸系 真梶製糸系 春名製糸系 坂本製糸系 大宗製糸系

蚕種製造の方では、藩制時代は、本町の林儀助という人が、毎年信州の御嶽山へ参詣に行った帰りに蚕種を購入して、農家に販売していたそうである。明治の初めのころは川島町の養蚕伝習所で、優良品種の研究と製造が行われたが、西麻植の工藤館が個人としては初めて製造に着手した。大正時代の最盛期には町内に約五十か所の業者が出現して、しのぎをけずっていたのである。

るが、業界の不振とともに次第にその姿を消していき、ついには昭和十六年（一九四一年）戦争のあおりで、麻植郡蚕種共同組合が結成統合された。戦後も筒井、片倉等で一時製造が継続されていたが、現在は筒井製糸だけが操業している。

昭和十年（一九三五年）の主要業者の生産高表が残っているのを紹介する。

- 一、五八一、九〇九グラム 工藤館蚕種合名会社
- 八一四、九四一グラム 後藤田蚕種合名会社
- 四六九、五一九グラム 筒井製糸株式会社
- 三七七、六六二グラム 鈴木利吉
- 一二一、七八一グラム 島勝蚕種製造所



工藤館

3、酪農から蔬菜園芸へ

戦時中は食糧増産の目的で農地は米麦中心に耕作されたが、戦後は食糧事情が好転するにつれて、農家は換金農業に転換、農地に飼料作物を作つて酪農を導入した。石井町高原に森永乳業徳島工場が創設され、昭和三十四年（一九五九年）には、明治乳業も集乳所を設け、同三十六年（一九六一年）には、西麻植に同社鴨島工場を招致して、一時は町内で乳牛飼育千頭を越えた時代もありこの時期には多くの飼育農家が一、二頭から十頭くらいを飼育していた。しかし最近では大部分のものが廃業して、少数の農家が多頭飼育しているに過ぎない。なお、また鴨島町の平地部は蔬菜園芸に適し



ハウス栽培

た砂土、砂質土壌なので、最近ハウスカ栽培による蔬菜の速成栽培、特に茄子の栽培が盛んで、出荷市場も町内に二か所あり野菜の流通に貢献している。

4、商 業

藩制時代から藍作に対して藩は重税を課したにもかかわらず、当町の農地は藍作に適していて、収穫も多かったため、比較的うるおった生活をしており、藍玉製造業者や藍商たちも資金を蓄積していた人が多かった。それは藩制時代末期に藩への多額の献金によって高い『身居』^{*43}を取得した人々が当町には多かったことが記録に残っていることや、また豪農といわれた人たちの屋敷構えなどによっても察せられる。

明治ごろまでは、川島町が麻植郡の政治、経済の中心地であった関係で、旧鴨島町は寂しいところであったが、明治後期になって製糸工場が林立するようになり最盛期では七百人を越す女子従業員をかかえるようになって、購

買力も急増し、次第に商店街を形成するようになっていった。そして蚕業試験場が設置されてからは県の行政機関もつきつきと町内に設置されるようになった。



鴨島駅前商店街

藍商や藍玉製造業者、地主などの蓄積された資本は、製糸業や蚕種業に転換利用された。また阿波共同汽船の開設や私鉄建設にも利用され、交通の発達とともに旧鴨島町商店街の発展へとつながっていったのである。

製糸業界が不振になっても、徳島市のベッドタウン化、さらには戦後の経済発展と消費経済の伸展や中央橋の開通、人口の自然増加などにより、近隣町村の中心商店街としての発展は止まるところを知らない有様であった。

5、交通

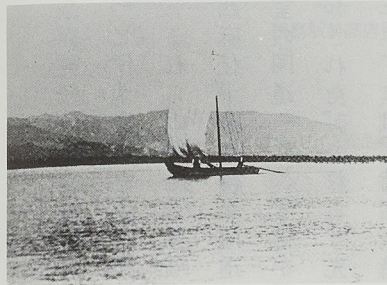
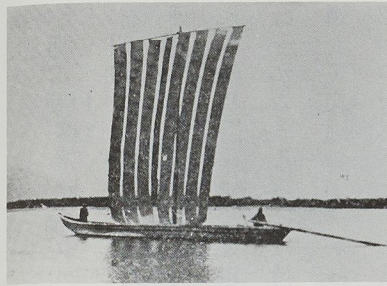
明治に入ってからずっと伊予街道を主とする道路にたよっていたが、自動車普及するにつれて、これらの道路も狭隘となった。しかし、大正十年（一九一一年）には、県道西麻植―下浦線が開通し便利になった。昭和三十八年（一九六三年）には待望の国道一九二号線が開通して交通の渋滞が緩和された。これより先の昭和二十八年（一九五三年）には、待ちに待った中央橋が開通して吉野川北岸との交通難が解消した。

鉄道が開通するまでは、物資の輸送は河川を利用していった。江川や飯尾川も大いに利用されていたが、飯尾川では牛島の市瀬橋付近、江川では



国道192号線と国道318号線の交差点

牛島杉の庵の下流の関の大樟付近、西麻植の吉野川遊園地の付近、吉野川では中央橋の少し下流付近や中央橋の上流の屈曲部付近が荷物の積み降ろし場となり、肥料や雑貨が運んで来られ、藍玉などが出荷されたといわれている。吉野川北岸への交通は渡し舟や、仮橋、潜水橋などによったが橋は出水により流されるなど不便が多かった。



帆 かけ 舟

鉄道の開通は人と物の輸送に画期的革命をもたらした。鴨島町の藍商や地主たちの蓄積された資本参加によって、徳島鉄道株式会社が設立され、明治三十二年（一八九九年）二月十六日、徳島か

ら鴨島まで初めて鉄道が通じ、さらにその後舟戸まで延長された。創設当時副社長であった川真田徳三郎は後、社長となって赤字経営をたて直したといわれている。

しかし、この鉄道も明治四十年（一九〇七年）九月一日、政府の鉄道院によつて買収され、舟戸から池田まで延長された。

第三節 社会生活

1、ふれ合いの生活

真言宗の開祖弘法大師が四国の生まれであり、また当町に四国霊場十一番



吉野川堤防

討論されている。現に地下水がダム建設によって鴨島町でもメートルも低下しているのは事実であり、江川の湧水の量も減少しているのは、吉野川本流の流量が減少したのも原因と思われる。ともあれ、大正の初期に堤防が完成するまでは、出水ごとに荒れに荒れたのである。明治時代に洪水の大きな被害を受けた年代は、記録によると、明治三年（一八七〇年）、五年、十七年、十八年、

2、災害

吉野川の分水問題が、県政の大きな問題として取りあげられているが、その根本は、「水害は徳島県だけが負い、その貴重な水は他県が利用するのはけしからん、県内にはまだまだ田の水や飲料水の不足するところが多いではないか、その要求を充足した後にこそ他県に分水すべきだ」という原則論から討論されている。現に地下水がダム建設によって鴨島町でもメートルも低下しているのは事実であり、江川の湧水の量も減少しているのは、吉野川本流の流量が減少したのも原因と思われる。ともあれ、大正の初期に堤防が完成するまでは、出水ごとに荒れに荒れたのである。明治時代に洪水の大きな被害を受けた年代は、記録によると、明治三年（一八七〇年）、五年、十七年、十八年、

札所藤井寺があり遍路道にあたるので、住民たちには仏教に対する信仰心が根づいていた。遍路の人たちに自分に代ってお四国を廻ってもらい、その御利益をいただくという気持ちや、施餓鬼といった意味合いの敬虔な気持ちから、お遍路さんを大事に扱い、お遍路さんが門口に立てば必ず金や物を布施したり、善根宿といって一夜を貸したり、お接待といって密柑や赤飯、五目すし、米、ちり紙、ふかし芋などをお遍路さんにあげるなどの行事を春の彼岸の中日やその前後に行う風習があった。これも現在は、幾つかのグループが藤井寺に向いて細々と行っているが、ほとんどすたれてしまった。鴨島町だけの問題ではないが純朴な地域の人々の心のふれ合いというものが次第に影を失いつつあるのは寂しい限りである。

また昨今鴨島町は夜の街ともいわれる一面もあるので、青少年育成鴨島町民会議が中心となって、青少年の非行防止に力を入れている。

二十一年、二十五年、三十年、三十二年、四十四年であるが、この外にも毎年のように小さな被害はあった。

内務省土木局が、善入寺島約五百戸の住民を犠牲にして、ここを遊水地帯として堤防を築いたことによって、よ

うやく我々は、吉野川の水の脅威から解放されたのである。

つぎに鴨島町として特記すべきは「鴨島の大火」である。昭和二十二年（一九四七年）三月二十五日十六時ごろ、鴨島町銀座通りの旅館付近から出火した火事は、折からの強い季節風にあおられて、またたく間に密集家屋を東へ東へと類焼し、遂に百四十五戸を焼いて、二十一時過ぎようやく鎮火したが、戦後の物資不足の時に無一物になった人々には、まことに気の毒な大火であった。



善入島住民移転の碑

3、農民運動と農地改革

第一次世界大戦後の世界的経済恐慌による養蚕農家への打撃と、それに追いついた打ちをかけた人絹の進出は、繭価の下落を促した。自作農家はどうか切り抜けたが、小作農家は塗炭の苦しみを味わい、どうにもならなくなり、まず小作料の値下げの外はないと、組合を作って団体による活動を開始した。

それが「全国農民組合西尾支部」の創立であった。そしてその調停が西尾村役場で行われ小作料の減額となり、この結果県下他町村の小作人たちは支部組織を結成して、昭和五年（一九三〇年）「全国農民組合徳島県連合会本部」が西麻植に置かれ、団結して行動するようになった。この運動は、中央から共産党々員が来て指導し、また大阪の全農総本部、東京の大衆党本部からの応援など共闘によって成果をあげた。この間、演説会を西麻植小学校、鴨島の文化座などで行ったが、会場には必ず演題の横に「臨官席」（三席から五席）が置かれ、そこには警官がサーベ

ルを杖にして終了するまで監視し、演説の途中で注意したり中止や検束をしたりして物々しい空気の中で決行された。

東京の大衆党本部からは、党主の麻生豊が応援に来て闘争を盛り上げ、中央の人たちは、西麻植の人たちの闘いぶりを見て、「ようもこんなにようやるのう」と驚嘆しきりであったという話も伝わっている。

この争議も一段落するころは養蚕も下火となり、日本も満洲事変から日支事変へと突入していった。

戦後は、社会党の阿部五郎代議士が農民組合再建を指導し、ふたたび西麻植支部が結成され、農地解放運動を展開したのである。

一方地主は、マッカーサーの指令による農地解放のうわさが流れるや、地主組合を結成、小作地の返還を企図したが、新しい農地法が公布され、それに伴ない農地に関する裁決機関である農地委員会が発足、大部分の小作地は小作人に解放されたのである。

第四節 文化

1、教 育

(1) 学 校 教 育

① 小 学 校

鴨島は経済的、文化的に立地条件に恵まれていたので、教育面でも先進的であった。すでに二百年ほど前から、寺小屋や私塾が多く開設されていた。特に儒者林居陵は飯尾で私塾を開いていたが、他国から先生を敬慕し、その教えを受ける者も多かったといわれている。

明治五年（一八七二年）学制が公布されるや、各地区それぞれ民家を借りて次のように着々と学童教育を開始した。

上浦小学校（明治七年（一八七四年）七月二十日）

牛島小学校（明治八年（一八七五年）五月）

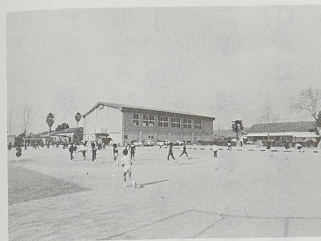
森山小学校（明治七年（一八七四年）八月）

飯尾敷地小学校（明治七年（一八七四年）五月十日）

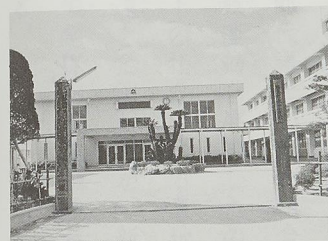
西麻植小学校（明治七年（一八七四年）一月一日）

鴨島小学校（明治八年（一八七五年）十月二十三日）

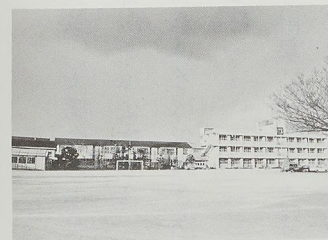
知恵島小学校（明治八年（一八七五年）三月二十五日）



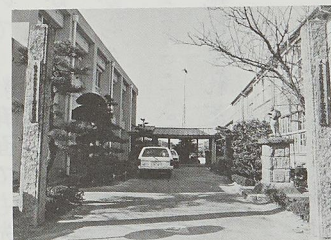
牛島小学校



森山小学校



飯尾敷地小学校



上浦小学校



西麻植小学校



鴨島小学校



知恵島小学校

ほかに麻植塚小学校、山路小学校、大東尋常小学校なども一時期創立された。なお三村高等小学校も明治二十一年（一八八八年）四月、川島町の麻植高等小学校の東分校として内原尋常小学校内に併設されたが、明治二十七年（一八九四年）三月に廃止、これよりも先の明治二十二年（一八八九年）町村制実施の際、牛島村、森山村、鴨島村の三村が組合立三村高等小学校を創設したが、明治四十四年（一九一一年）三月限りで廃校となった。

小学校は後に町立となり、数多くの児童たちを教育している。

② 中 学 校

戦後、学制改革があつて、各小学校に新制中学校が併設されたが、のち統合され、現在は鴨島東中学校と鴨島第一中学校の二校が、中学校教育の場となっている。

③ 高 等 学 校

私立鴨島女子商業学校が学制改革で、昭和二十三年（一九四八年）高等学校に認定された後、三十二年（一九五七年）四月に町立商業高等学校として引きつがれ、そして三十七年（一九六二年）三月には県に移管され、徳島県立鴨島商業高等学校



鴨島東中学校



鴨島第一中学校

校として現在に至っている。

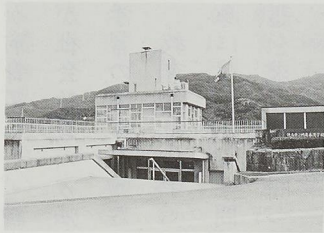
また、県立鴨島養護学校が昭和四十九年（一九七四年）四月一日敷地に開校され、小学校から高等学校までの過程を一環した教育が実施されている。

④ 私 立 学 校

女性教育機関として鴨島和洋裁縫女子学校、鴨島学園高等学校（閉校）、尾崎高等和洋裁女子学校（閉校）、などができ、幼児教育機関としては、敷地に博愛幼稚園（閉園）、鴨島幼稚園（現在のめぐみ幼稚園）、一般専門教育機関として鴨島友の会編物女学院、宮田商業速算学校などが設立された。

(2) 社 会 教 育

① 江戸時代までの庶民の教育
日本の社会教育活動は神仏による心身の浄化活動



県立鴨島養護学校



県立鴨島商業高等学校

が前身である。神官や僧侶が社会教育の指導者であって、お祓いや、お説教が社会教育の方法であり、お大師講やいろいろの講組もグループの話し合い学習の場であった。また、職業教育も徒弟制度の中で行われていた。

教育方針の中心は儒学（中国の孔子を主唱者とし、仁と礼を根本として修身にはじまる学問）の精神であり、それに神仏の絶対権威にすぎない加護、慈悲を求め人間づくりであった。具体的な徳目として、孝子、節婦、良妻、賢母を範とし、仁義報恩、勸善懲悪などの項目がかかげられていた。

この教育方針は、学校教育の前身である寺小屋や塾でも基本的にとり入れられていたが、本町の各宗派、各寺院でも月並法座や、彼岸会、報恩講など檀信徒の伝道教化の場における重点的講話事項となつて、新しい社会教育体制以前の庶民生活規範づくりの役割を果たしていた。

② 呉郷文庫

大正初期飯尾の故石原六郎氏が、個人出資で二千余冊の蔵書をもとに図書

館を建設して「呉郷文庫」と名づけ、地方の教育に貢献した。戦後嗣子育太郎の時代に、蔵書を県立図書館に移管し、建物は飯尾敷地小学校に移転したが、その後、昭和四十年（一九六五年）に新校舎建設のため取壊してしまったが、社会教育を語るうえで貴重な文化遺産であった。

③ 公民館

昭和二十四年（一九四九年）六月十日、社会教育法が制定され、全国的に社会教育は、いかに活況を呈し、新しい公民館も建設されてきた。

公民館は、社会教育の中心拠点として地域住民の教養を高め、新しいふるさとづくり運動の中核となり、社会教育関係団体の連絡調整機関の役割を果たしている。

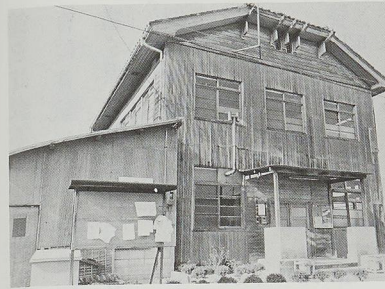
徳島県においても、各市町村は諸施設への出費の多い折ではあったが、昭



呉郷文庫（麻植郡史より）

和二十五年（一九五〇年）度末までには独立公民館の建設が四十五を数えるようになった。

本町においては、森山公民館が二十五年（一九五〇年）十月に、鴨島町中央公民館が二十六年（一九五一年）十一月二十日にはじめて建てられ、特に森山村では、独立公民館建設と同時に、当時大久保純逸村長が自ら森山公民



森山公民館

館長となり、専任主事を置き、全村八分館に分ち、本格的に社会教育を始めた。このとりくみは極めて秀れたものであった。

その後中央公民館は老朽化したため、昭和五十五年（一九八〇年）白亜の藍倉を模した立派な新館が建築され、社会教育の殿堂にふさわしい教育内容をもって運営されている。

④ 青年学級

昭和二十八年（一九五三年）八月十四日「青年学級振興法」が制定された直後、町教育委員会では、地域の実態に応じた年間計画を立て、自主的でも個性ある青年学級の創設を図った。その後うつり変わりをくりかえしながらも、六青年団体が互いに連携を保ちつつ現在に至っている。

⑤ 婦人学級

また昭和二十八年（一九五三年）には、森山婦人会（学級）が「農村にふさわしい婦人生活のあり方」について、三十年（一九五五年）には、牛島婦人会もそれぞれ徳島県教育委員会の指定を受け、研修に努めた。そして各婦人会とも婦人学級を開設し、多数の指導者が育成され、社会教育の中核母体



鴨島町中央公民館

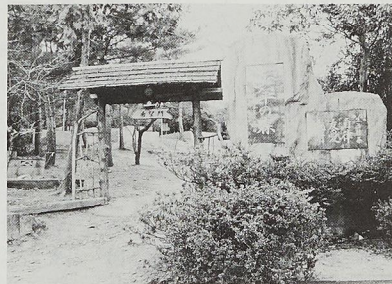
となった。そして、地域性を生かして学級組織の形態に合った目標をたて、毎年五学級が継続実施している。なお、昭和五十二年（一九七七年）より中央家庭婦人学級の講座を開設して地域の指導者養成に努めている。

⑥ 子ども会

昭和十二年（一九三七年）社会福祉事業の任にあたる方面委員がもうけられたが、二十二年（一九四七年）には、民生委員と改められ、民生委員が児童福祉委員も兼ねて一般社会人の生活保護と児童福祉事業に協力することになった。当時徳島県社会課では、一般社会事業を真に社会生活の上に役立て、円滑に運営していくにはもはや今の大人の考え方、活動だけでは到底不可能であり、この行き詰まりを打開するためには、民生事業を純真な子供の魂に植えつけるほかにないとし、県民の共感を得て子供民生委員が発足した。そうしてできた子供民生委員は、「すべてのお友だちを幸福にしましょう」という明確な目標のもとに活動するようになったのである。

活動目標は各学校によって多少の差異はあるが、基本綱領は次の五つである。

- お友だちは皆仲よくしましょう。
 - 困った人は助けましょう。
 - 先生の教えは必ず守りましょう。
 - 丈夫で勉強し、働きましょう。
 - 世の中の為になる人になりましょう。
- 特に昭和二十九年（一九五四年）一月には、



少年の森

森山小学校の中塚子ども会は、毎日新聞社主催による全国子ども会活動コンクールにおいて、全国表彰を受けた。

昭和四十七年（一九七二年）に鴨島町子ども会連合会が結成され、現在は九十四の単位子ども会が組織されて、全児童がこれに加入している。子ども会活動の大きな特色は、異年齢によるグループ編成と活動にあり、

遊びや運動、年間を通じて計画された各行事を行う中で、仲間意識と、年長、年少間の好ましい人間関係の育成と生活上のいろいろな技術や知恵やルールを身につけさせることにある。近年、全国的な傾向として、異年齢者間の遊びが少なくなり、リーダー不在の子供集団が問題になっているおりから、本町の子ども会活動はまことに意義深いものであるといえる。

⑦ 同 和 教 育

「自由と正義及び平和」実現のためには人類の尊厳と平等が守られなければならない。この指標をめざす国際人権規約を我が国は批准した。これは基本的人権の国際的保障をめざすものである。しかし、現在なお私たちの住むこの地域にも、基本的人権が侵され、差別され、苦しんでいる人たちがいる。同じ日本国民であり、同じ鴨島町の住民でありながら、同和地区に生まれたということだけで、職業の選択の自由や教育の機会均等が不当にも奪われ、今なお居住移転の自由や結婚の自由などが完全に保障されていないという許

すことのできぬ事実が存在している。

この問題解決のため、昭和二十八年（一九五三年）全国同和教育研究協議会が結成され、三十六年（一九六一年）に、鴨島町同和教育推進協議会が発足した。

昭和四十年（一九六五年）同和对策審議会答申が出され、四年後、同和对

策事業特別措置法が、さらに五十七年（一九八二年）には地域改善対策特別措置法が施行された。

この法の精神にのっとり、町同和教育推進協議会を中心にした、全町民をあげてのとりくみがなされていくが、一日も早い完全解決が望まれる。

町民全体の取り組みとしては、四十七年（一九七二年）度から、自治会単位の同和问题座談会を、五十七年（一九八二年）度からは自治会の班単位



同 和 啓 発 劇

の「班別話し合い実践」を実施している。

また、PTAも自主的に同和問題解決に取り組んでいる。会員全員が、家庭における同和教育のリーダーとなることをめざして、昭和五十五年（一九八〇年）度には、西麻植幼稚園PTA、つづいて西麻植小学校PTAが訪宅話し合い実践を実施した。さらに五十八年（一九八三年）度から牛島幼稚園PTAが家庭訪問話し合い研修を行い、一人ひとりの意識の変容（へんよう）をめざして努力を重ねている。

⑧ 青年有志会

昭和三十六年（一九六一年）から始まった西麻植小学校の出張学習に、地区の青年たちがかわったことがきっかけとなり、地域青年としての自覚と自立が生まれ、やがて青年団結成となった。

これら青年たちの活動は、多方面にわたり、すなわち同和問題啓発資料の編集、自治会班別研修や家庭訪問話し合い研修への参加、学習会での珠算の

指導、またスポーツを通して子供たちとの交流を深め、青少年の健全育成に努めるなどである。

このように青年たちは、部落差別から逃避（たいひ）せず真正面から真剣に取り組んでいる。

⑨ 生涯学習をめざして

これらの社会教育活動の中で、とりわけ重要なことは生涯学習の課題の検討と、社会教育関係者のはたすべき役割である。

この課題解決のために、昭和五十六年（一九八一年）度から毎年三月の第一日曜日に社会教育振興大会を開催し『ゆとりと生きがいのある町、連帯と協調の町、信頼と生きがいのある町』を研究テーマとし



社会教育振興大会

て、健全で明るい住みよい町づくりを推進している。

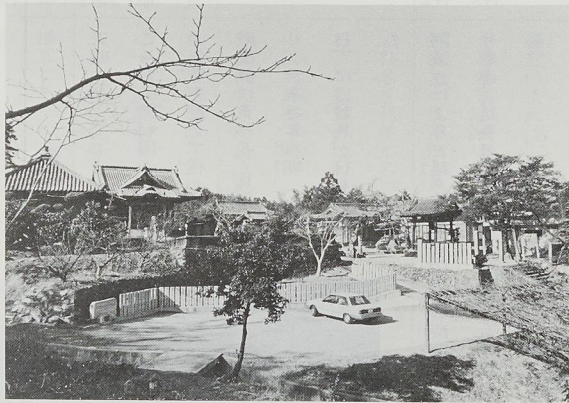
2、宗 教

本町として特筆すべき神社としては、西麻植の中内神社（祭神秘羽目神、足浜目門比売神）と牛島の杉尾神社（祭神天水沼間彦神、天水塞姫神）の二社が延喜式内社（延喜時代の国幣社）としての記録がある。

また寺院としては、弘法大師ゆかりの四国霊場八十八か所の第十一番札所藤井寺がある。巡礼の最盛期の大正のころは年間三十万人というおびただしい人々が、毎日、白衣にすげ笠をかむって、第十番札所の切幡寺から粟島渡しを渡って藤井寺へと、たんぼ道を次から次へと列をなして、金剛杖の鈴をならし南無大師遍照金剛を唱えながら歩いていたが、バスを利用するようになった今日、うら寂しい気持ちさがこみあげる。お接待の行事やお遍路さんを無料で泊めてあげた善根宿などもなつかしい思い出となってしまった。


本町敷地に、平安時代の寺院といわれる河辺寺跡の礎石が発見されているが、当時すでにこの辺りに寺が建立されていたということは、仏教文化を支える豪族の存在又は、寺を維持するに足る集落があったとも考えられる。


また山路の玉林寺は、鎌倉時代麻植の保司に任ぜられた鹿ヶ谷事件で有名な平康頼ゆかりの寺として有名である。

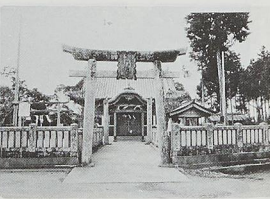


玉 林 寺

(1) 神社


杉尾神社	国中八幡神社	神社名
	上浦国中 (向麻山東麓)	鎮座地
	旧村社	旧社格
天水沼間彦神 天水塞姫神	誉田別命 事代主命	祭神
<p>天明(一七八一)〜八九年のころ、山路村国一八幡神社の分霊を迎えて祀った。社殿南側に東へ長く馬場があり、古来毎年八朔(八月一日)には競馬が行われていた。</p> <p>阿波志によると延喜五年(九〇五年)醍醐天皇の命により着手、延長五年(九二七年)完成されたといわれている。</p> <p>延喜式内社(式とは法律のようなもので、内とは法文</p>		
		由緒等
		

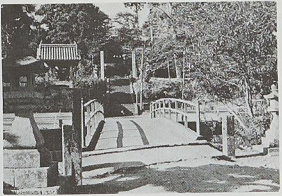

八幡神社		神社名
牛島宮間		鎮座地
旧御社		旧社格
息長足姫命 媛大日神 天日鷲命 道臣命	応神天皇	祭神
<p>に書かれている格のある神社) 縁起によれば、昔この付近は河に接し氾濫多く、そのため水塞の神を祭つたとされている。 馬場先に水沼池また高志良という所があり、古史伝に「社名を杉尾と名づけしは最近にして、里人は古志良というなり」とあり、社宝に麻草桶が二つある。一つに式内天水沼間、一つに式内天水塞の神名があり、裏には天文二年(一四六七年)と刻まれている。</p> <p>名西郡阿川の二宮八幡神社の大般若経(嘉慶二年(一三八八年)の奥書に牛島八幡宮とあるから古い社である。</p>		
		



熊野神社	山路寺谷	旧村社	伊弉諾神	伊弉冉神	熊野権現	大山祇命	事代主命	野槌神	光寺の山号が十川山であるので、これに付会したものであるであろうともいつている。
									



五所神社	麻植塚堂の元	旧村社	大麻杵命	伊弉冉命	伊弉冉命	大山祇命	誉田別命	息長足姫命	品陀和氣命	天児屋根命	仁徳天皇	国一八幡神社	山路字東原	旧村社
			俗称瑜伽神社。	大麻杵命は忌部の氏人の祖神。								往時は仙光寺がこの国一八幡神社の別当であった。阿波志(文化十二年(一八一五年)『藩撰の書』)には「山路村東原にあり国一を称す、源(十川)存保本村及び上浦、麻植塚を置きともに祀る」とあるが、一説には仙		

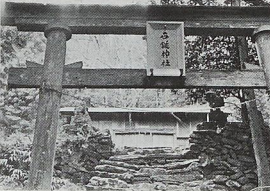




諏訪神社	中島字福井	旧村社	多邪御奈刀弥命 天照大神 大山祇神 事代主神 伊邪那岐神 迦具土神 岐外神
<p>八幡宮の縁起二巻あり、一つは延享三年（一七四六年）一つは正徳三年（一七一三年）に書かれたもので、これによると石清水八幡宮の分霊を迎えて祀るとあり、古い物に木像一對（随臣）と狛犬一對がある。</p> <p>文治二年（一一八六年）勧請と伝える。もとは諏訪の原にあった（昭和二十二年（一九四七年）ごろまで鎮座跡の古塚が残っていた）、慶応元年（一八六五年）の大水で飯尾川が氾濫し、上下島の諏訪の元に流され、そこに鎮座されていたのであるが、中島の絵ての人が氏子であったので大正十二年（一九二三年）四月現在地へ移転</p>			
			


八幡神社	森藤三谷	旧村社	火産靈神 奥津彦神 奥津姫神
八幡神社	菅田別命 足仲彦命 息長足姫命	天正（一五七三）九二年以前に石清水八幡宮の分霊を勧請して建てたといわれるが、古老の伝承によれば、当社は天正以前に天日鷲命をお祀りしてあったともいわれている。	天正年間（一五七三）九二年とも、永禄年間（一五八〇）七〇年ともいわれているが、内原菊太夫の一族が攝津宝塚の清荒神を勧請したと伝えている。
			
			


杉尾神社	若宮神社
喜来字乗島	喜来
旧村社	旧村社
大奈牟遅神 事代主命 嚴島姫命	大雀命 大名持神
<p>慶長年中(一五九六〜一六一五年)吉野川の大洪水で社殿を流出したが、乗島入道来心の子、了本が、父が守本尊としていた一寸八分(約六センチメートル)の地藏尊を御神体として旧社地に再建したと伝う。</p>	<p>不詳</p>
	



八幡神社	秋葉神社
鴨島本郷	鴨島
旧村社	
菅田列命 菅原道真公 鴨島六之進	火之迦具土神
<p>されて祀られた。</p>	<p>不詳</p>
	<p>鴨島城主鴨島六之進が天正七年(一五七九年)脇城外の戦で討死したので、この人をお祀りしたが、後八幡神社として菅田列命を合祀したといわれている。同社には神島神社と記した石碑があるので、元はこの名で呼ばれていたであろう。</p> 



敷島神社	石槌神社	飯尾神社	
敷地西宮	槌山地	飯尾宮の前	
旧村社	無格社	旧無格社	
神功皇后	猿田彦命 石土毘売命 石土毘古命	飯尾彦六 左衛門常房	飯尾氏の祖
明治四十二年(一九〇九年)九月十九日に村社河辺八幡神社と他の無格社小社九社を西宮神社に合祀し、新築	伊予の石槌山より分霊をい ただき、伊予出身の河野家 がここに勧請したと伝えら れ、行場には三十三尋の鉄 鎖がある。	つたといわれている。	寛永六年(一六二九年)里人により飯尾氏の祖常房を祀 来任中、当地へ詣り、 たぬが伝えられている。
			

天神社	若宮八幡神社
飯尾天神	上下島宮内
旧郷社	旧村社
菅原道真公 外 大山祇命 少彦名命 大己貴命	大鷦鷯命
菅公が筑紫へ左遷された折 当社を押し、菅公の祖父の清 たぬが、菅公の時(八〇九 公が嵯峨天皇の時(八〇九 〜二三年)阿波国司となり	不詳
	

中内神社	
西麻植中筋	
旧無格社	
秘羽目神 足浜目門比売神	
<p>建て、のち、まもなく立派な社殿を建立したと伝えている。ここでは、阿波で一か所しかない町指定文化財である天保五年（一八三四年）の陶製狛犬や、モロの木で作った両部鳥居があり、またこの陶製狛犬は鳴き犬といわれ有名である。</p> 	<p>当社は延喜式（延喜五年（九〇五年）編集に着手、延長五年（九二七年）完成された、政治のよりどころとなつた式目）に指定された小社であると伝えられている。阿波志には「延喜式亦為小祀、在西麻植村以中内神配祭、或曰敷地村水田中有天足祠、古木叢生恐是」とあるが、天足祠は、明治末ころ廢社となつて現在は何も残っていない。</p>

八幡神社	八幡神社		
西麻植壇の原	樋山地		
旧村社	旧村社		
誉田別命 息長足姫命 玉依姫命	仲哀天皇 応神天皇 神功皇后	仲哀天皇 玉依姫命 仁徳天皇 外	<p>して敷島神社と改称した。</p> 
<p>当社はむかし敷地河辺八幡宮の氏子であつた西麻植の人々が正保（一六四四〜四八年）、慶安（一六四八〜五二年）のころ、八月十五日の祭礼の際に行列の前後を争つて、現在の地に河辺八幡宮の分霊を受け小祠を</p>	不詳		

忌部神社	八坂神社		
牛島原	西知恵島	千田須賀西	
	旧村社		
天太玉命	素戔嗚命	野槌神	大山祇神
不詳	この社はもと天島須賀(中央橋の上手)にあったが、水害のため流されたので、この地に移転勧請したと伝えられている。	勧請して守護神として祀ったという、なお北須賀の野神社と出島神社がこの社に合祀されている。	
			

若宮神社	蛭子神社	鎮守神社	
知恵島	知恵島三軒屋	知恵島四ツ屋	
旧村社	旧村社		
大己貴命	蛭子神	武甕槌命	
不詳	不詳	不詳	
元禄年間(一六八八)一七〇四年に瀬尾某がこの地に			

神社名	鎮座地	旧社格	祭神	由緒等
雨足神社	敷地雨足			西麻植の中内神社が、この神社かどちらかが延喜式小社に比定されているが、明治末に敷島神社に合祀。
町内の廃社				
稻荷神社	西麻植江川		稻荷大明神	〃
若宮神社	西麻植大東		若田別命	〃
大山祇神社	西麻植東禪寺		大山祇命	〃
傘松神社	西麻植新田		大山祇命	不詳
春日神社	森藤春日免		天兒屋根命外	奈良の春日神社の分霊を勧請したと伝える。
若宮神社	森藤壇		平康頼公外	平康頼公を祀り「康頼神社」ともいう。
龍王神社	森藤奥三谷		豊玉彦命外	〃
山神社	森藤六坊		大山祇命	〃
庚申祠	町内六十余		猿田彦神	不詳

工藤神社	西麻植中筋		工藤甲斐守	大木星の祖神を祀る。
舟戸神社	鴨島本郷		茅野姫命	不詳
御嶽神社	上浦國中		木曾御嶽山大神	御嶽教の布教活動
竜眼神社	上浦國中	旧無格社	出雲大神	出雲教の布教活動
伊勢神社	牛島高白		大日靈貴命	〃
八坂神社	牛島城の内	旧無格社	素戔嗚命	〃
神木神社	牛島西の辻	旧無格社	伊弉冉命	不詳
稻垣神社	牛島桑上		倉稻魂命	牛島地区への浸水を防ぐため、藩の許可を得ず独断で堤防を築き責任を負って切腹した稲垣監物を祀る。
天満神社	牛島天神	旧無格社	菅原道真公	〃
八坂彦神社	牛島宮間		八坂彦神	〃
麻塚神社	牛島原		天比哩刀咩命	不詳

水神社	河辺八幡宮	諏訪神社	呉羽神社
先須賀	敷地	諏訪原	飯尾唐人
洪水の難を守り、旱魃に備えて水神を祀っていたが、明治の末に板野郡吉野町一条の一条神社に合祀された。	元は敷地の河辺寺跡の上にあつたが、明治の末に敷島神社に合祀された。	文治年間(一八五〇年)勸請したといわれるが洪水で流され現在は中島諏訪の原に祀られている。	伝説では呉から来た織人をお祀りしてあつたといわれているが、現在は石碑が残っている。社地から古墳時代のものであると思われる土器片が出土したといわれている。

(2) 教派 神道

① 黒住教

明治二十二年(一八八九年) 川真田六兵衛により仮説教所が開設され、現

在に至っているが、現在は鴨島教会所、上浦教会所があつて布教活動をしている。

② 金光教

大正十四年(一九二五年) 布教活動が始められ、現在は、喜来に布教所を設け活動を続けている。



黒住教鴨島教会所

③ 天理教

明治十八年(一八八五年) より布教、現在鴨島分教会(中島)、の外に数か所の分教会があつて盛んに活動を続けている。

(3) 寺院

寺名・宗派・位置	本尊	本尊及び沿革
西岡山 通 玄 寺	本尊………聖観世音菩薩	沿革………永正十五年(一五一八年) 僧定秀が真言を修する一連寺を開基し

禅宗
臨濟宗
妙心寺派

(上浦)

たが、この寺が上浦城主有持道慶の菩提寺であつたといわれている。しかし、天正年間（一五七三〜一五九二年）に兵火にあい焼失したが、明暦年間（一六五五〜五八年）に徳島の興源寺の二代目住職頑叟和尚玄利がこの地に中興したので臨濟宗となり、寺名も改めたといわれている。



金岳山

本行寺

本門法華宗

(上浦)

本尊……日蓮上人
沿革……京都大本山妙蓮寺の第四十八世日成上人により明治十九年（一八八六年）開基、昔この地は七堂伽藍のある大滝寺があつたが、天正年間（一五七三〜一五九二年）に兵火にあい再建されなかつた土地であると伝えている。

本尊……観世音菩薩

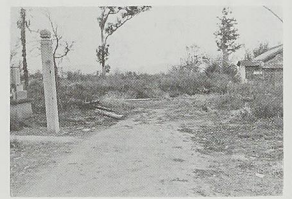
沿革……開基は不明であるが、仙光寺の古文書中に永正十一年（一五一四

白華山
円通寺

禅宗
臨濟宗
妙心寺派

(牛島)

年）にこの寺のことが出ている。天正年間に釈周山が居つたと阿波志にあるが、過去帳によると中興開山で武田信玄の弟なりといひ伝えている。このころは京都南禅寺の末寺であつた。以前は吉野川の北にあつたが慶長年間（一五九六〜一六一五年）に洪水があつたため現地に移つて来たといわれているが、近年火災にあい、藤原時代の作といわれていた本尊も焼失してしまい、現在は通玄寺が管理している。



本尊……阿弥陀如来

沿革……寛喜二年（一二三〇年）に小笠原貫道の開基と伝えられ、真宗の寺としては、阿波国で最初に開かれた寺といわれている。小笠原長清が阿波の守護職となつてから代々阿波に住み守護の職を奪われても、三好氏、一宮氏などとしてその子孫が残つたが、貫道は宮成少輔成重と称し

安養山
西覚寺

浄土真宗

西本願寺派

(牛島)

延命山 宝王院 (願成寺) 真言宗 御室派 (牛島)	<p>たが、のち出家して貫道と改め諸国を巡錫して承久二年(一二二〇年)阿波に帰り、寛喜二年に小笠原家の菩提を弔うために一字を建立して「森の坊」と称した。それから後、大阪の石山本願寺に兵乱があつて、この宗は危機を迎えたが、其の際に五世の恵了は食糧を送るなど、宗の為に活躍した。その子の大道になつて寺号を西覚寺と改めたのである。また、幕末に勤王の志士であつて、大阪で獄死した藤井藍田をかくまったこともあり、その掛軸が残つてゐる。ここには、国の重文級である藤原時代の仏説宝如来三昧経がある。</p> <p>本尊……薬師如来</p> <p>沿革……開基及び沿革は不明であるが、廃寺の願成寺とつながりがあると いわれている。仙光寺の天文二十一年(一五五二年)の「阿波国念行者 修験道法度之事」という文書に願成寺のことが書かれているが、この寺 は後廃寺となり、その地に元和三年(一六一七年)僧憲照が中興し、宝</p>
---	--

唯信山成就院 西円寺 浄土真宗 西本願寺派 (麻植塚)	<p>王院と称した。なお「阿波志」には、この地に廃寺長楽寺があつたと記 されている。</p> <p>本尊……阿弥陀如来</p> <p>沿革……縁起によると永享十年(一四三八年)堂元の地に創設された。そ の開基は高祖聖人の直弟子、幡谷四郎信勝で後出家して唯信と改めてい る。永享十年(一四三八年)のころ麻植塚に来て付近の荒地を開拓し、 この地に寺基を定めたが、天正年中戦火にあい、のち再建して成就院と 称したことが慶長年中(一五九六〜一六一四年)の検地帳に見えている。 後に西円寺と称え、明治になつて再度火災にあつて、古記録など焼失し て細かいことは不明であるという。</p> <p>本尊……日蓮大菩薩</p> <p>沿革……開基は不明であるが、正平年間(一三四六〜七〇年)に僧善智が 中興したと伝えられている。古くは国一八幡神社の別当であつて、持福</p>
---	--

(山路)

院と称えており、修験の聖護院の末寺であった。天正年間（一五七三〜九二年）には長宗我部のためにまた焼かれたとの由緒もある。明治維新の際に天台宗に改修して園城寺の末寺となったが、のちしばらくして十川右近師が日蓮宗に改宗した。当寺には貴重な古文書が數十通残っている。

本尊……阿弥陀如来

蓮華山宝池院

沿革……敬善法師がこの地に天文十九年（一五五〇年）開基したと伝えら

善正寺
真宗興正寺派
(山路)

れ、また「阿波志」には善勝寺とあり、西本願寺に属して二百年余り前に准如という僧が今の寺名に改めた」と記してある。

本尊……千手観音（十一面観音）

慈眼山

玉林寺

沿革……文治二年（一一八六年）平康頼（照性法師）が源頼朝の命により

臨濟宗
妙心寺派

麻植保司に任せられて翌文治三年（一一八七年）、後白河法皇から賜わった閻浮檀金の一寸八分（約六センチメートル）の千手観音を本尊として

(山路)

現地に慈眼山玉林寺を建立し、また少し離れた西の方に鬼界山補陀洛寺をも建立し、また西南の六坊にも有徳の僧六人を置いて、鹿ヶ谷事件関係者や亡母の冥福を祈ったといわれている。「阿波志」には天正中兵火にあつたため両寺を合わせて一山にし、十二の子院も備えたが、後すべて廃絶したと言ひ伝えられている。慶長年中（一五九六〜一六一五年）亮長老と祖越がともに堂宇を建立して曹洞宗としたが、また荒廃し、延宝年間（一六七三〜八一年）にその弟子宗本が現地に中興開山して臨濟宗となった。阿波西国第三十番の観音霊場である。

本尊……地藏菩薩

東光山持正院

三谷寺
真言宗御室派

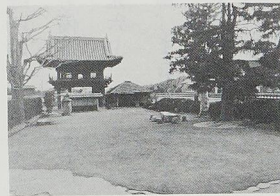
沿革……元は森藤西浦谷にあつたといわれ、その地から約千年くらい前の古瓦が発見されているというから古い寺である。天正年間戦火にあつ

(森藤)

だが、同十四年(一五八六年)現地に再建した。仙光寺の古文書中に天正十七年(一五八九年)ならびに、文禄二年(一五九三年)に「三谷寺云々」の記載がみられる。

本尊……阿弥陀如来

沿革……寺記に「乗島入道来心は三好存保に仕え、子源三郎、源五郎が幼少のため備前国の城主藤井石見守豊住を養子とした、のち乗島入道と号す。「天正十年(一五八二年)八月二十七日、長宗我部軍の兵火にあい、翌二十八日戦死す」とあり、豊住は顯如上人の弟子となつて出家し浄心と改め、来心の靈を慰めるため、草庵を建て専修念仏した。寛永七年(一六三〇年)円了のとき徳住寺と称え、同二十年(一六四三年)本堂を建立したといわれている。この寺は山門と庭園の調和が美しい。



専修山
徳住寺
浄土真宗
西本願寺派
(鴨島)

一念山円寂院

常教寺

真宗興正寺派

(鴨島)

本尊……阿弥陀如来

沿革……過去帳によると天文十三年(一五四四年)に僧善正が、この地に開基したとあり、その後は天正年間の兵火にあつて、焼失し、詳細不明という。

本尊……阿弥陀如来

宝幢山成就院
持福寺
真言宗御室派
(飯尾)

沿革……当山は、元名西郡阿野村阿川にあり、「弘法大師焼山寺開山の節、信心深き老人夫婦の為に阿弥陀如来を刻み云々」と伝えており、天正年間に火災にあい、のち慶長年間(一五九六〜一六一五年)に京都大覚寺の末寺院として僧晴雲がこの地に再興したといわれている。

この寺には県指定文化財の金胎両界五瓶(現在奈良博物館に預け保管中である)など文化財が多い。近年立派な庭園が作られている。

本尊……愛染明王

速成山覚性院
報恩寺

沿革……報恩寺は、弘仁年間弘法大師さまが御修行の時に、当地で一人の

真言宗御室派
(飯尾)

少年を得度させ、僧侶としての進むべき道を教えると同時に、愛染明王像を刻まれて、愛情の守り仏として与えた。のち少年は立派に成長して大師の恩に報いるため堂を建て、寺名を報恩寺としたと伝えられている。最初当寺は樋山地にあったが、鎌倉時代ごろに現在の地に移転されたと思われる。このころから麻植莊西方の地頭である飯尾氏から代々信仰され、なかでも飯尾常房の信仰が厚かったと伝えられている。天正年間に火災で堂宇焼失したが、その後慶長年間に僧憲明によって再興された。藍作が盛んな時期には、本尊愛染明王の愛と藍の音が通ずるため、藍作関係者から特に信仰された。観音堂の聖観世音菩薩は、飯尾のお観音さんと親しまれ、多くの人々から厚く信仰されている。阿波西国第二十九番の観音霊場である。

金剛山
藤井寺

臨濟宗
妙心寺派
(飯尾)

本尊……薬師如来

沿革……寺伝によれば、平安時代(七九四〜一一九二年)弘法大師四十二歳の時、諸人とともに厄難を除かんがために薬師如来の像を刻まれ安置したといわれているが、この本尊は雲辺寺の千手観音の作者で、備中の国の仏師経尋によって作られたもので、久安四年(一一四八年)の銘があるから、この年に建立されたものであろう。当時、真言宗の寺院であったと思われるが、天正年間に兵火にかかり、のち延宝年間(一六七三〜一八一年)釈南山禪師がこの地に来て再興し、この時に真言宗が禅宗に変わったといわれている。

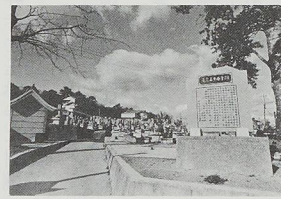
この寺は四国八十八か所の第十一番霊場であり、昔から全国の信者が参詣に訪れているが、最盛期の大正のころは年間参拝者三十万人といわれていて、そのころは、みんな



な歩いてお詣りをしていた。特にここから焼山寺への道三里（約十二キロメートル）は難所といわれていたが、現在は四国遍路道に指定され、次第に整備されつつある。また日本三大瓦師といわれる河津沢太の作である鬼瓦が本堂の屋根に置かれ、またその墓も境内にある。ここには美しい溪谷にそって、写し霊場（本霊場と同じのミニ霊場）である四国八十八か所や、西国三十三か所が祀られていて、多くの人がお参りをしている。

庵の部		名称	所在地	摘要
長戸庵	敷地長戸	河辺庵	敷地	本尊は地藏菩薩で、河辺庵寺跡の南側にある。
				長戸にあつて、藤井寺から焼山寺への途中にあり、現在は屋根

庵寺		寺名・宗派・位置	本尊及び沿革
つんば庵	牛島宮間	龜泉山 十力寺 禅宗 臨濟宗 妙心寺派 (西麻植)	本尊……延命地藏菩薩 沿革……元は東禅寺と称したが、天正年間に兵火にあい焼失したと伝えられ、元和八年（一六二二年）に再興し、寛文十一年（一六七一）十力寺と改称した。ここからは布目瓦が数十点出土しているので室町時代（一三九三〜一五七二年）以前に建てられたのではないかといわれている。昭和四十
三十三番庵	上浦国木地		
			も落ち、無住である。 宝王院に属し、本尊は観世音菩薩である。 西国三十三か所の本尊をお祀りしてある。



河辺寺 (神戸寺) (敷地)		宝形寺 (鴨島)	西宮寺
<p>八年(一九七三年) 廢寺となったが、その檀家は藤井寺と玉林寺に引継がれている。</p> <p>敷地字宮の北にある。昭和二十九年(一九五四年) 畑地の耕作者が表土を四十七センチばかり掘り下げたところ礎石を發見、発掘したところ十七個の礎石があり、瓦や礎石配置などから、こうべ寺跡であることが確認され、時代考証の結果、平安時代中期ごろのものであるということになった。</p> <p>昔からのいい伝えがほんとうのことであつたわけで、平安時代、すでにこの辺りにこの寺をささえるだけの人たちが住んでいたことが証明できる。</p>		<p>字殿郷に宝形寺という寺があつたが、天正のころ兵火にかつたという伝承がある。今その寺跡という処に宝形寺の石碑がある。</p> <p>「村邑見聞言上記」(村々から藩へ提出した文書)に</p>	

東福寺 (敷地)		<p>「敷地村に西宮寺という寺ありける趣、専らに申し伝えたり、証跡とは田畑の字にも西宮とはあれど、西宮寺とはなければ証とするにたらずとも云いけれど、右の名負なる西の宮の壇という所に必ずしも寺院の廢跡ならんと思えて、只今にては五輪と石塔などを掘出し……」とあるので、おそらく寺跡であろうと思われる。</p> <p>河辺廢寺より北の方、四、五百メートルばかりの地の字に東福という所があつて、ここに東福寺という寺があつたと言ひ伝えられているが、それを証明するのは今のところ何もない。</p>
-------------	--	--

(4) キリスト教・創価学会・生長の家・天地日月神明教


キリスト教は、大正十年(一九二一年)ごろに布教を開始した。それまでは、徳島から出張して来て、私立鴨島裁縫女学校で伝導したりしていた。戦後の昭和二十一年(一九四六年) 鴨島学園をキリスト教鴨島兄弟教会として再び


伝導を開始し、現在に至っている。

創価学会は新開地に麻植郡本部があり牛島・鴨島・西鴨島に三支部を置き寺としては知恵島に法成院があつて宗教活動を続けている。生長の家と天地日月神明教も本町に支部を置き活動を続けている。

3、鴨島町の文化財

(1) 指定文化財

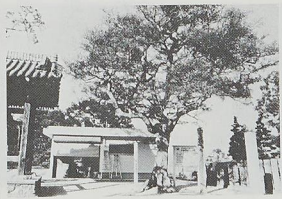
指定区分	種別	所在と名称	説	明
国指定 明治四十四年 (一九一〇) 八月九日指定 (昭和三十八年七月 一日名称変更)	彫刻	藤井寺の 木造釈迦如来坐像	藤原時代末期久安四年(一一四八年)備中の国の仏師経尋によつて彫刻されたもので、像の高さ八十七センチ、一木作り、両手首先、葉壺はともに後補である。像は当初は漆箔とされたが、現在は剝落、素地をみせている。	

県指定 昭和二十八年 (一九五三) 七月二十一日指定	工芸品	鴨島河野正雄氏蔵 短刀	応永(一四〇〇年)ころの作品。長さ十九・五センチの懐剣で銘表精良斎宗次、銘裏政久とあり、表に五三の桐の象嵌、裏に登龍を彫りこんであり、ツカの握りに水鳥の彫刻を巻きこんでいる。新刀であるが、彫りが立派なので指定されている。	
県指定 昭和二十九年 (一九五四) 八月六日指定	天然記念物	江川水温異常現象	最近までは真夏のころの水温十度くらい、真冬の水温は二十一度くらいになり、外温と反対の水温で全国的にも珍しい異常現象であつたが、近年は早明浦ダム、池田ダムの建設や吉野川遊園地の上手の吉野川堤内河川敷の砂利採取などにより時期も二、三か月早くずれ、また水温もいくぶんちがってきた。	

昭和三十九年 (一九六五) 三月五日指定	天然記念物	森藤壇の大クス	根もとの樹周十メートル、樹高三十五メートル、樹冠五十平方メートルの大樹で推定樹齢九百年を越すと言われ、樹下では、加茂の大樟、藍住町矢上の大樟について三番目の大樹である。
昭和三十九年 (一九六五) 三月五日指定	天然記念物	山路玉林寺のモクコク	ツバキ科に属する巨木で樹周二メートル、樹高三メートル、推定樹齢三百七十年ぐらいいと言われ、戦後鐘樓の再建されるまでは釣り鐘をこの木に釣って時を報じたと言われている。
昭和三十九年 (一九六五) 三月五日指定	史跡	河辺寺跡	昭和二十九年(一九五四年)耕作者が発見。発掘調査の結果十七個の礎石が出て、その配置ならびに出土した瓦、鎧瓦(八葉複蓮片)などにより、河辺寺跡であることが確認。時代考証の結果、平安中期ごろのものと判断されている。
昭和三十九年 (一九六五) 三月五日指定	史跡	山路玉林寺の秋迦十六善神像	絹本着色、たて九十五・三センチ、よこ三十七・七センチで鎌倉の末葉ごろのものと言われている。十六善神とは般若十六善神、十六神王などもよばれ大般若経あるいはその経の受持者を守護する十六体の護法善神のことである。
昭和三十九年 (一九六五) 三月五日指定	史跡	飯尾持福寺の金胎両界五瓶	五瓶は造壇修法の際、大壇の中央及び四隅に置く五個の宝瓶で壇上を莊嚴にするためのものである。灌頂の時は正覚壇に移して瓶水を受者に濯ぐ、これを五瓶灌頂という。作者不詳。室町以降の



昭和三十九年 (一九六五) 三月五日指定	天然記念物	森藤壇の大クス	根もとの樹周十メートル、樹高三十五メートル、樹冠五十平方メートルの大樹で推定樹齢九百年を越すと言われ、樹下では、加茂の大樟、藍住町矢上の大樟について三番目の大樹である。
昭和三十九年 (一九六五) 三月五日指定	天然記念物	山路玉林寺のモクコク	ツバキ科に属する巨木で樹周二メートル、樹高三メートル、推定樹齢三百七十年ぐらいいと言われ、戦後鐘樓の再建されるまでは釣り鐘をこの木に釣って時を報じたと言われている。
昭和三十九年 (一九六五) 三月五日指定	史跡	河辺寺跡	昭和二十九年(一九五四年)耕作者が発見。発掘調査の結果十七個の礎石が出て、その配置ならびに出土した瓦、鎧瓦(八葉複蓮片)などにより、河辺寺跡であることが確認。時代考証の結果、平安中期ごろのものと判断されている。
昭和三十九年 (一九六五) 三月五日指定	史跡	山路玉林寺の秋迦十六善神像	絹本着色、たて九十五・三センチ、よこ三十七・七センチで鎌倉の末葉ごろのものと言われている。十六善神とは般若十六善神、十六神王などもよばれ大般若経あるいはその経の受持者を守護する十六体の護法善神のことである。
昭和三十九年 (一九六五) 三月五日指定	史跡	飯尾持福寺の金胎両界五瓶	五瓶は造壇修法の際、大壇の中央及び四隅に置く五個の宝瓶で壇上を莊嚴にするためのものである。灌頂の時は正覚壇に移して瓶水を受者に濯ぐ、これを五瓶灌頂という。作者不詳。室町以降の



町指定 昭和五十七年 (一九八二) 七月十五日指定	石造文化財	西麻植八幡神社の 太鼓橋	天明三年(一七八三年)、願主多田永之助重正、多田門吾重利の刻字があり、橋長二・四メートル、反りは二十センチで県下でも反りとしては珍らしいものと思われる。	
町指定 昭和五十七年 (一九八二) 七月十五日指定	木造文化財	西麻植八幡神社の 両部鳥居 (四脚鳥居)	棟札の字が読解不明なので年代はわからないが、鳥居の種類から徳川末期(一八五〇年)ごろと思われる。材料はネズミサシ(ムロ)の木で徳島県でも他にないものと思われる。	

町指定 昭和五十六年 (一九八一) 十二月一日指定	工芸品	西麻植八幡神社の 陶製狛犬	大きなものでは、四国に四か所(伊予の石鎧神社、讃岐の金比羅神社、春日神社と西麻植八幡神社)。阿波ではここだけのもので、備前焼き、伊部の窯元森嘉太郎中節の銘があり、天保五年(一八三四年)の作で、四国の他のものは全部無銘である。	
町指定 昭和五十六年 (一九八一) 十二月一日指定	石造文化財	飯尾報恩寺の 板碑	作といわれている。胴部に三昧形を線刻してある。この例は、高野山の竜光院にしかなく、現在は奈良博物館に寄託してある。元享元年(三二二年)のもので、麻植郡では一番古く、県下で古さでは現在十番目くらいであろうか。板碑とは石で作った供養の塔婆といわれている。	

町指定 昭和四十八年 (一九七三) 十二月二十五日指定	無形文化財	森山 獅子舞	東森藤地区のもので遠く文政年間(一八一八〜三〇年)に始まり、毎年継続して祭礼の時に舞っている。
町指定 昭和五十四年 (一九七九) 十月二十五日指定	無形文化財	牛島雲龍組 たたら	たたら組は、徳川時代には県下各地にあつて梵鐘鑄造などの時に多くの組が競いあつて材料を溶かしたのであるが、現在は、各地ともなくなっている。大正時代には町内に四組ほどあつたが、現在残っているのはここだけである。



(2) その他の文化財

① 仏像

所在と寺院名	仏像名	説明
飯尾持福寺	本尊 阿弥陀如来坐像	製作年代は鎌倉初期(一一九九年)ごろと見られている。この像は像高五十四センチで、 ^{※52} 来迎印の形で肉身の部分は金泥が施されているが後補。着衣の部分は下地漆が現れている。当初は漆箔像であつたと思われる。
麻植塚西円寺	本尊 阿弥陀如来立像	像高五十四センチ、来迎印、寄木内劔玉眼漆箔である。
牛島西覚寺	本尊 阿弥陀如来立像	像高四十五センチ、来迎印にて、寄木内劔玉眼漆箔である。
鴨島常教寺	本尊 阿弥陀如来立像	像高三十四センチ、来迎印にて、寄木内劔玉眼漆箔

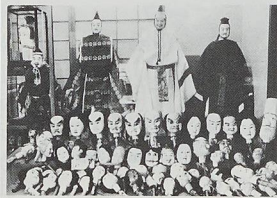
② 絵画・経巻・その他		所在	名称	説明
山路玉林寺	支那の銅製	山路玉林寺	支那の銅製	中国の明又は清時代の作とみられる。
内原十王堂	十王像	内原十王堂	十王像	閻魔王像を中心に九王及び脱衣婆像などがあり、江戸時代（一六〇三〜一八六七年）の作といわれる。
飯尾持福寺	涅槃槃図	飯尾持福寺	涅槃槃図	絹本着色、縦一一センチ、横一五六センチ、室町時代（一三九九〜一五七三年）の作。 麻本着色、縦九四・五センチ、横九六・七センチ、



喜来徳住寺	本尊 阿弥陀如来立像	喜来徳住寺	本尊 阿弥陀如来立像	である。
山路善正寺	本尊 阿弥陀如来立像	山路善正寺	本尊 阿弥陀如来立像	像高五十九センチ、来迎印にて、寄木内刳玉眼漆箔である。
上浦本行寺	本尊像	上浦本行寺	本尊像	法華特有の如来像二軀を圍繞する菩薩像四軀で本尊を形成されている。
山路仙光寺	毘沙門天像	山路仙光寺	毘沙門天像	像高四十二センチの毘沙門天立像。
上浦通玄寺	不動明王像	上浦通玄寺	不動明王・矜羯羅・制吒迦の三尊像	
牛島宝王院	外二軀	牛島宝王院	外二軀	
森藤三谷寺	地藏菩薩立像	森藤三谷寺	地藏菩薩立像	像高四十七センチの地藏菩薩立像・像高四十九センチの千手観音像・神像。
飯尾報恩寺	本尊 愛染明王坐像	飯尾報恩寺	本尊 愛染明王坐像	像高三十六センチ、寄木内刳玉眼彩色である。

(3) 史跡名勝
① 麻植保司平康頼の史跡(五十四ページ参照)

飯尾深見定一宅	山路熊野神社	人形座の道具一式	鏡	初代、二代、三代天狗久や天狗辨の人形頭百三十頭余りや人形座の道具一式を保存している。	ていず、高野山金剛峰寺に大部分が移され、その他は各地に散在している。 台とも四十六センチ高、径十八センチの鏡で表面に熊野三所権現の刻銘がある。
---------	--------	----------	---	--	--



飯尾藤井寺	地蔵十王図	紙本著色、縦八三・五センチ、横四一センチ、水墨画。	銘文から明の嘉靖四十二年(一五六三年)の作とみられる。
飯尾報恩寺	地藏磨図	紙本著色、縦一三〇・五センチ、横五二・九センチ 京都知恩院の地藏菩薩画像の模作と思われる。	
牛島西覚寺	仏説宝如来三昧經一卷	藤原時代(八二〇〜一一八〇年)のもので、とびら絵に如来が三昧の世界を説いている絵がある絵巻で紺紙、金泥、銀罪で中尊寺一切経であるという。	中尊寺一切経とは、岩手県の中尊寺で多数の僧によつて書かれたといわれ現在中尊寺に少部しか残つ

② 四国霊場第十一番札所 藤井寺

飯尾にある藤井寺は、弘法大師の霊場であるにかかわらず禅宗の臨濟宗、妙心寺派の寺である。もとは真言宗であったが、後、禅宗の僧南山禅師が再興したので、宗派が変わったのである。

春は桜と藤、秋は紅葉と、ともに溪谷美と相まって景色のよいことでも有名である。またここにミニ四国八十八か所や西国観音三十三か所霊場などもあり、信仰と観光のメッカである。

また本堂の鬼瓦などは、敷地に住んでいた瓦師、日本三大名人の一人といわれる河津沢太の作であり、沢太の墓もこの



河津沢太の鬼瓦

の墓地にある。

③ 吉野川遊園地と異常水温

吉野川遊園地の旧名は江川遊園地である。工藤館蚕種合名会社社長の工藤鷹助氏が、西麻植駅の乗降客が少なく、国鉄当局から廃止駅の第一候補にあげられていたので、その存続策の一つとして、また県民の遊園地として利用してもらうために、私費で開発に乗り出したのが昭和三年（一九二八年）で、同六年（一九三一年）十一月完成以来、県民は無料でその恩恵に浴していたのである。昭和四十四年（一九六九年）春、徳島新聞社が四国博覧会を開催した折、第一会場を徳島公園内に置き、第二会場をここ江川に置き、いろいろな遊具を備えたが、それが好評であったので、徳島興発株式会社が借りて、吉野川遊園地と名称も改め、現在に至っている。

なお、ここに湧出する水は、夏は冷たく十度くらいに、冬は逆に二十一度くらいに上昇する水温異常現象で全国でも珍らしく、昭和二十九年（一九五

四年) 県から天然記念物に指定された。
 しかし現在では吉野川本流の河川敷の砂礫を採取したり、ダム建設などによる水量の減少、また水路の変遷によるためか、三か月くらい水温現象が早くなり、温度も幾分違ってきているようで、その原因を究明しているが、はっきりしたことはわかっていない。



吉野川遊園地

なお戦前に詩人野口雨情が、この遊園地に来た時に作詩された江川小唄は、ほのぼのとした詩情あふれる、なごやかな唄で、当時の江川遊園地の情景を適切に表現している。

江川小唄

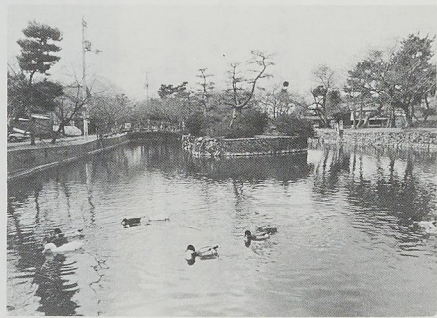
- 一、誰と逢うやら 気もいそいそと
 渡る朱ぬりの 太鼓ばし
- 二、風に吹かれりや 柳でさえも
 水に恥かし 影うつす

④ 鴨島公園

鴨島駅西方三百メートルにある江川を取り入れた公園であり、特に春は桜の名所として有名である。また園内には当時四国一を誇る藍倉を模した鴨島町中央公民館(老人福祉センター併設)と、昭和八年(一九三三年)に県下にはじめて完成した町民プール(現在鴨島第一中学校)や町民体育館などがある。

⑤ 少年の森

青少年育成の場として飯尾天神社境内にアスレチック、キャンプや宿泊の設備をもった町営による少年の森があり、町内、町外の人々に訓練の場として多く利用されている。



鴨島公園

⑥ 鴨島小唄・ごくろう音頭

五九郎音頭

大川 栄 策

コロムビア・オーケストラ

一、柑のかすりに、ハイカラ帽子、サテ
袴、ちよびひげ、よく似合う
人云、集めた、涙を笑い、ソレソレソレ
ソレソレソレソレ
五九郎音頭だ、手拍子打って
阿波の鴨島、総おどり
シヤンと、シヤンと、総おどり

二、花の浅草、舞台もせまく、サテ
自由、唱えた、壮士ぶり
喜劇、ひとすじ、男を勝けた、ソレソレソレ
こは、曾我退家、徳富町

三、明日へ流れる、江川の水に、サテ
涙す、あかるい、町づくり
徳を讃える、五九郎市に、ソレソレソレ
寄せる人波、人の渦ッレ

四、愛のひとこと、「ごくろうさん」はサテ
通う、こころの、合言葉
さらし、ゆたかな、きずなの町に、ソレソレソレ
今日も、人情の、葉が吹く、ソレ

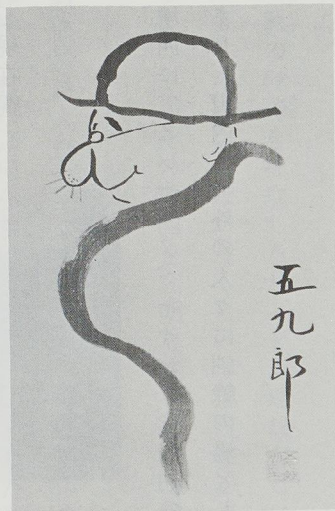
鴨島小唄

わかばちどり
コロムビア・オーケストラ

野口 由情作詞
坂本龍子作曲
山田 良夫編曲

一、春の鴨島公園桜、アリアセ
花も若木の、花も若木の、枝に咲く
枝に咲く、アリアヨイヤサノ、アリアセ

二、此処は鴨島阿波の名所、アリアセ
見せやりたい、見せやりたい
菊人形、アリアヨイヤサノ、菊人形



三、吉野川原もまた夜は夜中、アリアセ
啼いてくれる、啼いてくれる
川千鳥、アリアヨイヤサノ、川千鳥

四、吉野川から吹く川原は、アリアセ
夏の鴨島、夏の鴨島
そよそよと、アリアヨイヤサノ、そよそよと

五、夜は港に螢は草に、アリアセ
星は夜空の、星は夜空の
上にある、アリアヨイヤサノ、上にある

六、夏の夜すがら江川の螢、アリアセ
闇照す、アリアヨイヤサノ、闇照す
通う心の、通う心の

七、吉野川筋鴨島町を、アリアセ
忘れなざるな、忘れなざるな
螢どこ、アリアヨイヤサノ、螢どこ

4、芸能・文芸・音楽・スポーツ

(1) 人形芝居と浄瑠璃

人々は重税に苦しみながらも生活にゆとりができるようになって、民衆の
娯楽として義太夫がとりあげられ、県内に人形座が多くできた。藩内では最
盛期には六十二座もあつたと言われ、その各座が藩内外を小屋掛で興業して
まわった。

鴨島町内では、戦後も飯尾の
深見巴竜を座主とする本家阿波
源之丞一座と笹山金太夫一座が
残っている。義太夫も今のカラ
オケのように流行し、本町でも
有名な人が出ている。



本家阿波源之丞の人形

森藤で代々酒釀造業を営んでいた吉村家の長男武一郎は、南海大椽である。彼は、阿波素人浄瑠璃人気投票において大関であったが、明治三十九年（一九〇六年）大隈重信伯の邸で、菅原四段目「吃の又平」をかたり聞かせたところ、その妙技に感心した大隈伯は、自ら筆をとって「南海大椽」の称号を書いて贈ったといわれている。なお大椽とは、芸能人に与えられる最高位の位である。また、同時代に高橋巴竜（飯尾）も南海大椽と同じ技量の語り手であったと言われている。

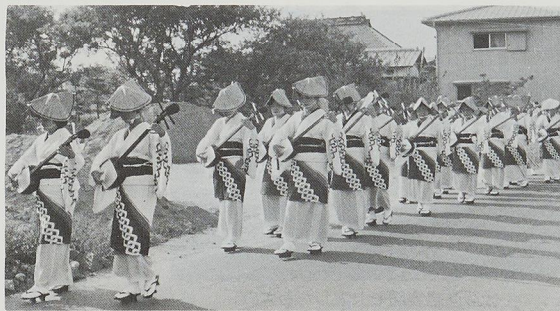
その弟子、飯尾の深見巴竜（深見定一）は、老齢ながら社会教育などにも活躍しているが、氏は大正のころまで六十余座もあった阿波の伝統芸である人形座の滅亡するのをうれい、せめて一座でも残したいと、池田町の笹山金太夫一座を買いとり、その上にまた、阿波源之丞一座をも引き取ってこれを継承している。そしてこれらの座の持っていた天狗久（初代、二代、三代）、天狗辨などの人形頭百三十余頭を保存している。

氏的一座は、戦後四国各地で依頼に応じ公演して、社会活動に協力しているが、特に昭和三十一年（一九五六年）三月十八日、大阪文楽座の足元の大阪産経会館で、氏が座元である本家阿波源之丞一座が発表会を開催した時には大盛況で、氏自身も「傾城阿波の鳴門」を語り、氏の子息は桐竹雛之助名



大阪産経会館で上演したときの
賤ヶ嶽三段目の真柴筑前守久吉

で「巡礼お鶴」と「太閤記の初菊」の人形を使った。昼は千六百人、夜は千五百人の大入り満員で、大いに阿波の伝統文化を宣伝、紹介した。また氏の所有する人形「国姓爺合戦の和藤内」は、昭和二十五年（一九五〇年）天皇四国巡遊の時に、徳島の内町小学校で見ていただいている。巴龍の息子、小巴龍（利実）は十歳ころより人形に親しみ、早くも十六歳では座元として、父に代り活躍しているが、語り手としては豊竹



三味線流し

小巴龍、三味線弾きとしては花沢仙寿、人形使いとしては桐竹雛之助の芸名で、それぞれ名手であり、また父の意思を継いで人形の保存にも力を入れているが、氏の宅では毎月、その月に関係ある芸題の人形を飾り変えて、展示している。

また氏は中絶していた情緒たつぷりな、鳥追い姿で、太ざお三味線（義太夫に使う大きな三味線）による義太夫流しを復活し、毎年の盆には徳島市や郷土鴨島で、昔そのままの流しを披露し、その美しい阿波の伝統を守りつづけている。

(2) 芝居小屋と映画館と菊人形

芝居なども大正のころまでは小屋掛で所々で行われていた。西麻植に明治の終わりに



菊人形

ごろ、酒蔵を改造して、『日出座』という、麻植郡では

じめての芝居小屋が開設され、芝居や連鎖劇、活動写真が上映された。昭和のはじめごろ、鴨島に「文化座」という映画館ができて、製糸工場の女の人たちを主なお客と



日の出座

して繁栄したが、テレビにおされて映画も下火になってしまった。鴨島の町が発展するとともに有志相寄り、昭和三年（一九二八年）から菊人形をはじめ、有楽座を大菊人形の会場として町の名物にしたが、時代の波とともにさびれてしまい、最近まで『鴨島東宝』だけが、映画上映館として残っていた。

(3) 文 芸

藩制時代においても和歌、俳句、川柳、狂歌などのグループ活動がなされていたと記録にも残っている。藍商人の旦那芸として相当盛んなようであった。

明治以後においてもその火は燃え続けていたことが神社の奉納額などに残っている。



① 俳 句

昭和十年（一九三五年）飯尾に「銀詠会」が生まれ、句集「しろがね」発刊、昭和十三年には「公孫樹吟社」句会が誕生、戦後の昭和三十四年（一九五九年）には、飯尾で女性がカツポー着のまま集まったの句会というので、「カツポー」句会が始められた。

「ひまわり」句会も昭和四十五年（一九七〇年）に生まれ、現在も河野春が支部長として、毎月句会を開いている。

② 川 柳

戦後昭和二十一年（一九四六年）には「七曜」が生まれ、昭和二十六年は発展的解消をして黒田一角を主宰に「河童ペンクラブ」が最近まで活動していたが、氏の死去後も、毎月欠かさず定例句会を続けている。

③ 郷土誌の発行

大正六年（一九一七年）、当町の久保忠男が、「麻植郡郷土誌」を独力で発

しているが、充実した内容と写真は、貴重な資料として現在も高く評価され、人々の研究資料として利用されている。昭和三十九年（一九六四年）には、教育委員会から「鴨島町誌」が発刊されたが、発行部数が少なく、町内には余り残っていないようである。昭和五十四年（一九七九年）には、飯尾敷地ふるさと大学により「飯尾敷地むかしむかし」が発刊され、昭和五十七年（一九八三年）には、西麻植公民館から「風土記にしおえ」が出ている。

④ 音 楽

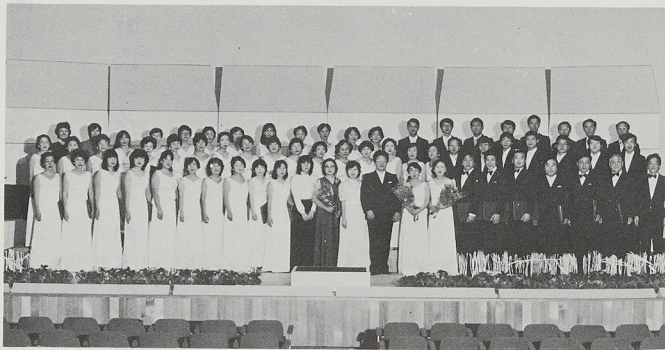
戦後女性の音楽活動が目立って来て、ピアノ教室は軒並みとっていいほどで幼女の音楽熱をあおっている。また、中年以上の女性を対象に大正琴も盛んである。

特筆すべきは、県下でも数少ない合唱団の誕生である。「ママさんコーラス」が始められたのは、昭和五十二年（一九七七年）である。また、五十五年（一九八〇年）に誕生した「鴨島合唱団」が、甲斐尚美、青野美代子両女

史の指導のもとに、毎週練習を重ねている。昭和五十八年（一九八三年）秋の第四回発表会には、満員の聴衆を前に、新たに加入した男性とともに、「鳴門男声合唱団」フロイデの応援を得て、「ハレルヤ」を合唱するなど、「第九」への夢をのせて練習にはげんでいる。

⑤ ス ポ ー ツ

本町スポーツで特筆すべきは、軟式テニスである。大正から昭和初期にかけて県内で大流行を来し、県下各地でひっきりなしに大会が開かれたが、当町では鴨島の暁クラブが強く、特にその中で川真



第4回鴨島合唱団定期演奏会